

氏名	宮澤 純子
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第6号
学位授与年月日	平成23年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	日本語版 Adult-Adolescent Parenting Inventory (AAPI-2) の 実用性の検討
論文審査委員	主査 教授 前田 和子 副査 教授 池田 明子 副査 教授 神里 みどり

論文内容の要旨

ペアレンティングとは、子どもの健やかな成長と発達を保証するための親の態度、行動、信念であり、適切なペアレンティングのための支援は子どもの健康を促進するために重要である。本研究は、ペアレンティングのリスクアセスメントおよび子育て教育の効果測定のために米国で作成された Adult-Adolescent Parenting Inventory (以下 AAPI-2) (Bavolek & Keene, 1999) が日本の一地域において使用可能であるか否かを確認することによって、日本において利用可能で簡便なペアレンティングのアセスメントツールを探究し、子どもの健康に寄与するための親支援に役立てることを目的とした。研究デザインは、量的研究と質的研究を併用したミックス法であり、研究1、研究2の2つの研究を行った。研究1は AAPI-2 の日本語版 (以下 JAAPI-2) を作成し、その信頼性・妥当性を確かめること、研究2はフォーカスグループインタビューを行い、保育士の考える、子どもに対する親の不適切なペアレンティングを知り、AAPI-2 の構成概念には含まれないが、日常的にみられる不適切なペアレンティングの様相を明らかにすることを目的とした。

研究1. JAAPI-2 の信頼性と妥当性

対象と方法 県内の保育所に自治体を通じて研究協力を依頼し、同意の得られた保育所を研究協力施設とした。県内の18の保育所(都市部7、離島11)に通う0~6歳の子ども1004名とその子どもにかかわる保育士のうち、参加同意の得られたものを研究対象者とした。

質問紙調査には、3種類の無記名自記式質問紙を用いた。質問紙の内容は、以下のとおりである。

①「親用第1回」：JAAPI-2、子どもと家族の属性、健康状態および生活状態。②「親用第2回」：JAAPI-2。③「保育士用」：保育士による親の子育てについての評定

結果と考察 第1回調査は757名の親（回収率75.4%）、第2回調査は583名の親（回収率77.0%）、保育士調査は664名（回収率87.7%）の回答を得た。第1回調査の対象者757名は、母親90.1%、年齢は19～69歳（Mean32.8歳、SD6.2）、職業ありが81.2%であった。子どもの性別は男児51.5%、女児46.1%、月齢は1～73ヶ月（Mean33.6（2歳9ヶ月）、SD17.6）であった。JAAPI-2の信頼性、妥当性については、以下のような結果を得た。①因子分析では、5因子32項目が抽出され、原版の5因子構造をほぼ支持することが示された。②JAAPI-2得点の低得点群（25ile未満）と高得点群（75ile以上）で保育士評定の平均値を比較した結果では有意な差（ $t=2.39$, $p=0.018$ ）がみられ、JAAPI-2の妥当性が示された。③JAAPI-2の内的一貫性を示すクロンバック α 係数は、総得点で0.87、各因子では0.64～0.74であり、Test-Retest相関係数は総得点で0.87、各因子は0.67～0.73であり、信頼性が認められる結果であった。

研究2. 保育士の考える不適切なペアレンティング

対象と方法 研究1の研究協力施設となった保育所のうちの3施設で、それぞれ5～9名の保育士のグループ計23名を対象とした。インタビュー時間は各施設約1時間と設定し、保育士が考える適切または不適切なペアレンティングに関して自由に会話することを求めた。録音されたインタビュー内容から逐語録を作成し、逐語録の各発言を文脈に沿って単位化した。さらに単位化された記述内容を、意味内容を損なわないように簡潔な表現に書き換え、これを情報単位として「親の不適切な行動」「親の不適切な行動の要因」「不適切な行動に対する示唆・対策」「子どもの様子や子どもをとりまく状況」「その他」に分類した。このうち「親の不適切な行動」「不適切な行動の要因」について各情報単位を意味の類似性に従って分類、集約し、その関連性を検討した。次に、「親の不適切な行動」「不適切な行動の要因」の分析結果から、「保育士の考える親の不適切なペアレンティング」のカテゴリを抽出し、AAPI-2の構成概念と比較した。

結果と考察 3施設のインタビューの総発言数は216、情報単位数は547であった。547情報単位のうち、親の行動に関するものは139（25.4%）あった。親の行動には不適切な行動、適切な行動、適不適不明な行動が含まれ、「親の不適切な行動」に関するものは、94（17.2%）、「不適切な行動の要因」に関するものは113（20.7%）あった。「親の不適切な行動」は、11に分類することができ、その内容は、“必要以上に保育所に長時間預ける”、“基本的ケアが十分でない”、“子どもの安全の確保ができない”、“情緒的温かさが不足している”、“子どもができることを親がしてしまう”、“子どもの言いなりになっている”、“子どもにダメといえない”、“叱る時に他の人のせいにする”、“感情的に叱る”、“脅す、乱暴な言葉を使う”、“過度な体罰を行う”であった。不適切な行動の要因となっているものは、親の要因、子どもの要因、環境要因の3つに分類し、その要因と不適切な行動との組み合わせによる分析から不適切なペアレンティングカテゴリを抽出した。保育士の考える不適切なペアレンテ

ィングのカテゴリは 9 つあり、①子どもの発達やしつけの方法についての理解不足のために子どもに必要なケアをしたり、必要な統制ができない“子ども、子育てについての知識不足による不適切な行動、態度”、②子どもの特性を理由として子どもを拒否する“情緒的な温かさの不足”、③子どものことよりも自分の生活を優先するために、子どもとの関わりが減ったり、子どものニーズを二の次にする“自分中心、自分の生活を優先する態度”、④子どもの発達を考慮せずに大人と同じような行動を期待して子どものニーズを満たしたり、安全の確保ができない“子どもへの不適切な期待”、⑤頻度の多い体罰や乱暴な言葉での脅し、一貫性のないしつけなど“不適切なしつけの方法”、⑥親は、子どもをコントロールする必要はないというような不適切な認識のため、子どもの健康にとって重要な食事や睡眠を子どもまかせにしたり、ルールを教えなかったりする“親の役割に対する不適切な認識”、⑦遅いからなどの理由で子ども自身が選択する権利などを奪う“子どもの権利や主体性を尊重しない態度”、⑧子どもの意見を尊重することを重視し、子どもに必要な統制を欠く“過度な許容”、⑨子どもと接するのが面倒だからという理由で子どもを拒否したり、子どもの世話を最低限にしようとしたりする“子どもへの無関心、放任”であった。これを JAAPI-2 の構成概念と比較した結果、5 つの構成概念の他に、“過度な許容”、“子どもへの無関心、放任”などが含まれることが示唆され、JAAPI -2 の利用を考える際に項目の変更や追加が必要であることが示唆された。

論文審査結果の要旨

本論文は育児不安や児童虐待の増加を最優先すべき現代の母子保健看護上の課題と捉え、予防的観点から教育的支援等につなげるために、不適切なペアレンティングをするかもしれない予備群を早期発見できる、また支援プログラムの効果判定に使用できるアセスメントツールの開発に取り組んだものであり母子保健看護領域にふさわしい意義のある研究である。

論文はまず、文献検討から、全体として、国内外には育児支援を目的とした数多くのアセスメントツールがあり、多くのペアレンティング支援プログラムが行われているが、その対象者が親に限られていること、プログラムの効果を測定するのに有効なツールがないことを明らかにしている。筆者はその中から唯一存在した、問題が起こる前に対処するポピュレーションアプローチにふさわしいAdult-Adolescent Parenting Inventory (Bavolek & Keene, 2001) (以下AAPI-2) に着目した。このツールは、子どもをもたない者も含めた、13歳以上に適用するために米国で開発されたものであるが、本論文はこのツールの日本での応用可能性を検討するとともに、さらにAAPI-2に加味すべき日本人に特有の構成要素を探求することを目的としている。

AAPI-2の日本語版作成にあたっては、Bavolekから翻訳と使用の許可を得た後、2回のバックトランスレーションやスーパーバイザーの下で訳語の正確性とわかりやすさを検討し、プレテストおよび先行研究(宮澤, 2006)を行ったのちに2回の修正を加えて丁寧な手順を踏んでいることは評価に値する。

本論文は主として日本語版AAPI-2の信頼性と妥当性を検討した調査研究Ⅰと保育士の考える親の不適切な関わりに関するFGIによる研究Ⅱから構成されている。研究Ⅰの対象は沖縄県都市部A市および離島B市にある18保育所に通う0~6歳の親1004名と彼らの子どもを担当する保育士757名であった。研究Ⅱの対象はA市の3保育所保育士23名であった。

研究デザインはよく吟味され工夫されている。用いた研究方法は次の2点で優れている。①親のペアレンティングをより深く解釈するために、研究参加者として親だけでなく、その親の養育の実際をよく知る担当保育士も含めており、ペアとしてそれぞれの回答を比較検討しながら分析している。②AAPI-2の検討だけでなく、日本人に特有のペアレンティングの構成要素を見出し、追加するために保育士のFGIインタビュー調査を並行的に実施する手法は、米国製のツールの限界を補い、より有用なツールを提案するのに有益である。

研究Ⅰでは第1回調査は757名の親(回収率74.6%)、第2回調査は583名の親(回収率77.0%)保育士調査は664名(回収率87.7%)の回答を得た。このように多くの研究参加者を得られたことは、研究計画がしっかり準備され、各施設を訪問し直接説明することによって研究の意義と筆者の熱意が理解されたからであろう。

AAPI-2の信頼性の検討はTest-Retest相関係数と内的一貫性を示すクロンバック α 係数の検討によって、妥当性は因子分析、保育士評定との併存妥当性の検討によって行われた。その結果信頼性は十分に高い値とはいえないが信頼性が認められ、因子分析では40項目中8

項目が除外されたが、ほぼ原版の5因子構造を支持していた。このようにAAPI-2日本語版は32項目で応用可能性があることを見出せたこと、そしてFGIの結果、AAPI-2の5つの構成概念にはない、動揺型のペアレンティングやネグレクトにも注目する必要性のあることが示唆された結果は興味深い知見であり、オリジナリティあるものであった。

しかし、本論文の限界は対象者が沖縄県に限定されていること、子どものいない青少年から使えるツール開発を目指したにもかかわらず、対象者が乳幼児の親に限られていたことである。AAPI-2日本語版の応用可能性を論じ、最終的結論を得るにはさらに幅広い年齢層、日本の各地域に対象を求める必要があり、本論文は第1歩を踏み出したばかりという位置づけであろう。

修正が必要な点として、①限界を十分に意識した考察をすること、②本研究の保健看護上の意義が説明不足でありより具体的な説明を要すること等いくつかの指摘があったが、日本では今まで取り上げられることのなかったポピュレーションアプローチ型のペアレンティングアセスメントツールの開発に取組み、その応用可能性の道を開いたことは意義が高く、研究としても発展性があり、今後の努力次第では看護実践に活かせる可能性が大きいと判断し、審査委員会は本論文が博士（看護学）の学位に相当するとの結論に達した。